

Title	味噌買い橋をめぐって
Author(s)	井本, 英一
Citation	大阪外国語大学論集. 5 p.97-p.105
Issue Date	1991-07-31
oa:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79534">https://hdl.handle.net/11094/79534</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 味噌買い橋をめぐって

井 本 英 一

ある若者の父親が死んだ。彼は父の遺産を使い果たして貧乏になった。ある夜彼は父の夢を見た。夢の中で父がいった。「エジプトのカイロに行きなさい。そこでお前は宝を見つけるだろう」。若者は翌日エジプトに向かった。途中いろいろな苦労があったがカイロに着いた。彼はお腹がすいていたが、物乞いするのは恥ずかしいと思った。夜中に物乞いに出かければ、誰に顔を見られることもないので、そうするのがいいと思い、夜中になってから宿を出た。しかし、警官が彼を見て泥棒だと思った。そこで彼を捕まえて、「お前は泥棒だ」といった。

若者はいった。「私はバグダードの人間です」。警官が尋ねた。「なぜお前はカイロに来たのか」。若者は答えた。「父が死に、遺産を使い果たして貧乏になりました。ある夜、父の夢を見ました。父はカイロに行けば、そこで宝物を見つけることができるといいました。そこで、こうしてエジプトにやってきたのです」。警官は笑っていった。「私は今まで百回以上、同じ宝の夢をそのありがとと共に見てきている。それでも、バグダードには行ったこともない。たった一度夢を見ただけでカイロにやって来るとは、君も何という愚かな男だ」。若者は、警官が百回以上夢で見た宝はバグダードのどこにあるのか、彼に尋ねた。警官はそのありがたさを教えた。若者は、宝のありがたさが自分の家であることを知り驚いた。若者はバグダードに帰り、警官が教えてくれたありがたさを手がかりに宝を発見した。

真の宝はわれわれの目の前にある。しかし、われわれは、他人にそれを求めようとする。

この話は、ファルハド・ソブハーニー氏の『ペルシア語教本』第3版（ベルリン＝ニューヨーク、1971年）の第51課の物語である。教科書用に、ある程度、原話を修正していると思うが、原話の形はよく保たれているようである。原話がイランのどこで採集されたのか、どのような文献に記載されていたのか不明である。この話は、橋のモチーフが欠如している点を除けば、日本の「味噌買い橋」の話と筋は全く同じである。ただ、イランの話には、最後に教訓がついていて、それは「隣の花は赤い」式のものである。日本の「味噌買い橋」では「隣のじんだ味噌」という考えがあったのが、伝承の途中でそれが消えたのかも知れない。

昔、飛驒の沢山という所に、長吉という炭焼きがいた。ある夜、夢の中で老人が現われ「高山の味噌買い橋に立っていなさい。よいことを聞くから」といった。長吉は高山に出て味噌買い橋に立っていたが、五日目になって橋のそばの豆腐屋の主人が「なぜ毎日、そこに立っているのか」と尋ねた。長吉は夢の話をした。豆腐屋は笑って「つまらん夢なんか、あてにしなさんな。

私もこのあいだ夢を見たが、一人の老人が現われて、沢山という村に長吉という男がいる。その家のそばの松の木を掘れば宝が出るといったが、そんなばかげた夢なんか信ずる気にはなれん。お前さんもいいかげんにしてお帰んなさい」といった。長吉は急いで村に帰り、松の木を掘ると見ると、金銀のお金やいろいろな宝物がざくざくと出てきた。

おかげで長吉は長者になり、村の人々から福德長者といわれた（関敬吾編『桃太郎・舌きり雀・花さか爺ー日本の昔ばなしー』（II），岩波文庫，1956年。関敬吾『日本昔話大成』3，角川書店，昭和53年，246－249頁）。

関『大成』3にはこの話の異型が採録されているが、夢を見る男は貧しい百姓であったり、炭焼きであったり、貧乏な乞食のような母子であったりする。この点もイランの話と似る。『大成』3によると、この話の分布は、日本では東北地方から北陸・中部地方、中国地方、四国に及んでいる。注によると、アールネ・トムソンの『民話のタイプ』（第2版、ヘルシンキ、1973年）の1645番にあたる話であるが、怪しきまでにアールネが記述したものと一致する。しかし、わが分布を見れば、最近にもたらされたものではなさそうである（249頁）。柳田国男『昔話覚書』の「味噌買い橋」で、この話を伝播した者は、西洋の書物から学んだ気づかいはない。どこかに隠れてもとの種子はあった。いまにその出処もわかってくるかも知れぬ、と述べている（『定本 柳田国男集』6，469頁）。いっぽう、この話が書承的、翻案的なきらいがある、とされて久しいが、最近では、ヨーロッパ系の話の翻案作品、山崎光子著『夢の橋』（1921年）収録の「夢の橋」が民間に口承として定着したのではないかと推定されている（桜井美紀説、1990年、竹原威滋「グリムの伝説・橋の上の宝の夢」『ドイツ文学』86，1991年、日本独文学会）。橋はこの世とあの世の境界と考えられ、そこであの世の情報が手に入った。夢の中であの世の情報を手に入れ、さらに橋の上に立つのは、手続きが二重になっているといえる。イランやこれからあげる『アラビアン・ナイト』の類話には橋のモチーフがないので、橋のモチーフは後になってから付加されたと考えられる。波動理論から見ると、日本と欧州に残るこの型の話には橋のモチーフがあるが、この話の伝播の発進地方と考えられる中近東の話には橋のモチーフがない。そこで、橋のモチーフがある日本と欧州の話の方が古く、橋のモチーフがない中心部の中近東の話は改新型であるとも考えられる。しかし、川に架ける橋は下流に架ける場合は高度な土木工学の技術を必要としたので、東西に伝わった時期は比較的新しかったといえそうである。中心部に、橋のモチーフのある改新型の話がないのは矛盾するが、改新型がかつては古型と共存したが、前者が消えて後者のみが残ったと考えることもできる。

わが家に宝を見つける者は、みな貧しい人で、ときには乞食をしたりしなければならないほど貧しい。教訓的に見ると、貧しい正直者には神の恵みがあるとされたであろう。しかし、異界と接触する者は、全てをかなぐり捨てた状態でなければならないという宗教的観念が発生した時代の話が、このような型をとったのではなかろうか。宝のありかを教えてくれる相手は人間であるが、ふつうは貧しくはない。こちらが異界の代理者である。日本の話では、その他、炭焼きの男

が宝を手に入れる。炭焼き人は古代の鍛冶職人と組むか、自身も金属を溶かす鍛冶職人であったので、人々からは異能の持ち主と見られていた。炭焼きは、「炭焼き小五郎」をはじめ、いくつもの昔話に姿を現わす。炭焼きも、貧乏な若者と同じように、異界の神と交流できた。「味噌買い橋」の主人公に炭焼きをもってきたのは、炭焼きがもっていた職能の記憶があったからである。イランの周辺のアラブ世界では、九世紀ごろに出来た『アラビアン・ナイト』に類話が見られる。バグダードに大金持ちがいたが、金を使い果たして貧乏になった。ある夜夢の中で、「汝のしあわせはエジプトのカイロにあるので、そこへ行きなさい」というお告げがあった。男はカイロに到着したが、日もとっぷり暮れたので、モスクの中で眠った。そのとき、盗賊の団がモスクに入って来て、隣の民家に侵入した。人々が大声を立て、町奉行が部下をつれてやって来たので、賊たちは逃げていった。町奉行がモスクの中に入ると、バグダードから来た男が眠っていた。彼は捕らえられて鞭打たれ、牢に入れられた。三日あと、男は奉行に訊問され、カイロにやって来た理由を述べた。奉行は笑って、「自分は今まで、バグダードのこれこれの家の泉水の底に莫大なお金が埋まっている夢を三度も見たが、ついぞ出かけたことはない」といった。男は、それが自分の家であることを知り、バグダードに帰って泉水の底を掘ると、莫大な財宝を手に入れることができた（前嶋信次訳『アラビアン・ナイト』9，平凡社，1978年，第351夜－第352夜。大場正史訳『パートン版 千夜一夜物語』3，河出書房，昭和42年，第351夜－第352夜。この夜話の題は「貧乏してのち、また金持ちとなった人の話」である。

『アラビアン・ナイト』の話は、元来はイランの話であったものが多い。イランの話はインドの話に通ずるものが多い。この話の舞台はバグダードとカイロで、全くアラブ化した話になっている。はじめにあげたイランの話が『アラビアン・ナイト』の話の単なる焼き直しでないことは、話の筋の諸所から明らかである。イランの話にも『アラビアン・ナイト』の話にも、橋のモチーフは出ない。ただ、後者には、この世とあの世の境界であり、神の世界への敷居であるモスクが見られ、貧乏した男はそこで泊まった、このモスクは橋と同じ機能を果たすものであったと考えられる、ここで町奉行に逮捕され、三日のちに財宝のありかを奉行から教えられる。

アフガニスタンの首都カーブルを発ってジャラーラーバードに向かって東行するとき、カーブル川の北側の山地にはパシャイ族が住み、イラン系言語であるパシャイ語を話している。カーブル川の南側にはパタン族が住み、パシュト語が話される。1924年以来、この地方の西北インド諸語と接触するイラン語系少数民族の諸言語を調査したG. モルゲンスチャールネが収録した民話の中に次のような民話がある。

ある所に夫婦がいた、二人はいつも同じベッドに寝た。しかし男はいつも寝小便をした。妻がいった。「あなたはいつも、敷き布団と掛け蒲団を濡らすのね」。すると夫はいった。「悪魔が私にいたずらをするのさ」。妻がいった。「いいかげんにしてよ。私はあなたの傍で寝ているのよ」。妻はさらに続けた。「その悪魔に宝のありかを教えてとおっしゃいよ」。夫は答えた。「つぎの夜、悪魔が来たら、宝のありかを教えてくれるように頼もう」。夜になって、二人はベッド

に入った。やがて悪魔がやって来た。男は悪魔にいった。「お前は毎晩私にいたずらをするが、今日は宝を私の目の前に出してくれないかね」。すると悪魔は答えた。「よろしい。お目にかけましょう」。男は自分の家を出て、ある人の家に侵入し、黄金のバケツを手に入れた。そのとき、家の主人が目覚めた。悪魔は煙出しの穴の所に座って、男に手を差し出すようにいった。男は悪魔に手を差し出したが、片方の手には黄金のバケツを持っていた。悪魔は男を引き上げたが、家の主人が彼の足をつかんだ。男は悪魔にいった。「家の主人が私を捕まえた」。すると悪魔がいった。「うんこをしてやれ。そうすれば彼はお前を手放すだろう」。そこで男はうんこをした。男は目が覚めて自問した。「悪魔がいないぞ。私は何をしていたんだろう?」。やがて彼の妻が目覚ましていった。「ベッドが臭いわ。どうしてこんなことするのよ」。彼はいった。「お前が悪魔に宝のありかを教えてくれるように頼めと私にいったので、私はそこに行ったのだ。すると家の主人が起きてきて私の足を捕まえた。悪魔が私に、『うんこをしろ。そしたら彼はお前を手放すだろう』といった。そしたら、この始末さ」(G. Morgenstierne, Indo-Iranian Frontier Languages, vol. III, 2, Texts and Translations, Oslo, 1944, pp. 140-142)。

ここでは、夢の中で教えられた宝は、それを夢見た者の手には入らないで、糞尿だけが残る。神の代理者のような高山の豆腐屋やカイロの警官や町奉行が教えてくれた宝のありかには、夢の告げのとおり宝が見つかるが、悪魔が教えた宝のありかには、夢の中では宝があるが、夢のあとでは糞尿だけしかない。悪魔はトリックスターとして男を翻弄する。ソブハーニー、前掲書には次のような話がある。

モッラー(イスラムの説教師)の妻: 神さまは悪魔もおつくりになったのですか。

モッラー: そうだ。しかし、今まで誰も彼を見た者はいない。

(モッラーが眠ったとき、夢の中で悪魔が現われる)

悪魔: モッラーよ。お前は私に何か用があるのか。お前は私を見たいと思っただろう。さあ、よく私を見ろ。

モッラー: お前は人間の敵だ。お前は人間を騙す。お前のひげを引っっこ抜いてやる。

モッラーの妻: あなた。どうして自分のひげを引き抜くのですか。目を覚ましてよ(第32課)。

この話の中には、悪魔が宝のありかを教える部分はなく、人をたぶらかす部分だけがある。金持ちが貧乏になり、夢の告げで宝のありかを知るモチーフと、その失敗談はもとは一組のものであったらしい。トルコ語で書かれた智慧ばなしである『ナスレディン・ホジャ物語』(護雅夫訳、平凡社、1965年)の「貧乏物語」の項にその名残が見られる。

ある男が父親の莫大な遺産を相続したが、仲間の連中とまたたく間に湯水のように使いはたして貧乏になってしまった。男はホジャの所へ来て、貧乏になってしまったが、何かよい考えはないかと尋ねる。ホジャはそのうち貧乏暮らしに馴れっこになるだろうと答える(116頁)

ある晩、ホジャが夢を見た。彼はある洞窟へ行ったが、壁面にある多くの穴から水が流れ出ている。洞窟の住人たちは、これらの穴から日々の食糧が流れ出ているのだといった。ホジャは自

分の食糧の穴に行ったが、自分の穴からは一滴の水も落ちてこないで、編み針で穴をこじあげた途端、「痛い!」という悲鳴が聞こえたので、ホジャはびっくりして目が覚めた。見ると妻の片目をほじくり出していた。ホジャは、「えらいことをした。食糧の穴を掘げようと思ったら、妻を盲目にしてしまった」と叫んだ (117-118頁)。

最初の話は、金持ちの息子が父の遺産を使いはたして貧乏になるが、味噌買い橋の夢は見ない。二番目の話は、夢の中で日々の食糧が出る洞窟を見る。日々の食糧は宝であるが、夢は悪魔がホジャに見させたもので、結果は妻の目をほじくり出すという悲劇に終わる。アフガニスタン、イラン、トルコの話は同一ではないが、トリックスターによるいたずらという点で一致する。最初の話は、金持ちの息子が貧乏しても夢も見ないし、宝のありかの教示も受けない。一方、前掲、ファルハドの第51課や『アラビアン・ナイト』第351-第352話に見られるように、完全な味噌買い橋の話が残っている。ホジャの最初の話は、これらの話がくずれた形であろう。ホジャは貧乏になった男に宝のありかを教えるのではなく、貧乏に馴れるから心配するなどと答える。二番目の話では、夢で見た宝である食糧が手に入らず、妻を不具にしてしまう。これら二つの話が同じ項目の中に分類され、一本の話になっていないことに注目しなければならない。二つの話が所によっては一本になったのか、一本の話が二つに分かれたのか、いずれかであろう。いずれにしても、これらの話は改新された型であると考えられる。

トルコには、そのほかに、バグダードで富を手に入れる話がある。W. エーベルハルトとP. N. ボラタウ『トルコ民話の型』(ヴィスバーデン, 1953年)の第133型「バグダードでの幸運」に、二、三の話の筋が載録してある。

(1)かつては金持ちだったが、貧乏になった商人が、バグダードに行き、そこでナツメヤシの実を売ろうと思った。しかし、彼のナツメヤシは高すぎた。彼はバグダードで富を手に入れるという夢占いを信じ、土を掘って、長い間求めてきた財宝を手に入れた。(149頁)。

(2)貧乏になった商人が、イエメンで自分の聲に冷遇された。しかし、アレppoでは養子に厚遇された。運命が好転したとき、彼は再びイエメンに出かけた。最初、イエメンに滞在したとき、彼は数珠を失ったが、このたびは、その数珠が鏡のうしろから、ポトンと落ちて自分の手に返った (149-150頁)。

(3)ある人が彼の幸運がバグダードにあるという夢を見る。バグダードで、ブドウの実が彼の口に入ったので、彼はこれが自分の幸運かと思う。しかし、一人の托鉢僧が、宝は故郷の家の中に隠されてあると彼に告げる。彼は家に帰りそれを取り出す。しかし、妻には、彼は金の卵を生むのだと答える。うわさが広まったので、役人が卵に税金をかけるためにやってくる。そこで彼は金の卵を差し出した。役人は彼から嚢三ばい分を取り上げ、彼は一嚢分を手に入れることを許された (150頁)。

(1)の話は『アラビアン・ナイト』の話のくずれたものと考えられる。貧乏になった商人は、バグダードで富を手に入れると夢見て、そのままそこで富を手にする。(2)の話もくずれているが、

バグダードに行ってさしたる富を手に入れなかったが、托鉢僧の指示で、自分の家に隠されている財宝を手に入れる。(3)の話にはさらに、役人が金を三瓊分も取り上げる後日譚がついている。(2)の話では、バグダードでうまくゆかなかった宝探しのモチーフは、イエメンで冷遇された話になっており、自分の家で宝を探し出したモチーフはアレppoで厚遇された話になっている。これにも余分の話が付いており、商人はもう一度イエメンに出かけ、失った数珠を手に入れている。

アフガニスタン、イラン、イラク、トルコにわたって見られる「味噌買い橋」の話は、元の話型をそのままよく保っているものと、形がくずれたものとの両方がある。原型に近い話は、この話の伝播の震源地と考えられる中近東から見れば東西の辺境にあたるヨーロッパや極東によく残っている。グリム『ドイツ伝説集』上（人文書院、1987年）に、次のような話が載録されている。

ある男が、夢で、レーゲンスブルクの橋に行くと、金持ちになれようというお告げを聞いた。男は毎日橋に足を運んだ。二週間したころ、一人の商人が何をしているのかと男に尋ねた。男は夢で見たことを話した。商人は笑って、自分もあの大きな木の下に（そういって商人はその木をさした）お金がつまった釜が埋まってあるのを夢で見たけど、そんなことは気にもとめないといった。そこで男はその木の下を掘ったところ、宝が見つかり、男は大金持ちになった（第212話、「橋の上の宝の夢」）。この話には類話がついている。パン屋の小僧がリュベック（あるいはケンペン）の橋の上に行けば宝が見つかるという夢を見た。いく度も橋の上を行ったり来たりしていると、一人の乞食が話しかけてきて、何をしているのかと尋ねた。乞食は、自分もメルケンの教会墓地の菩提樹の下に宝が埋まっているという夢を見たが、そこへ行こうとは思わないと話した。小僧は乞食に夢で見た橋の上の宝を与え、自分は教会墓地へ行き、菩提樹の下で宝を掘りあてた（同）。レーゲンスブルク（あるいはリュベック）の橋の話では、故郷の自分の家の中で宝を見つけるのではないが、商人や乞食が現われて宝のありかを教える。リュベックの橋の話では、自分の夢を与えて乞食の夢をもらい、宝を見つけている。ここでは夢を交換している。夢を買う話に発展する動機がここにはある。乞食からここでは無形の夢をもらったが、物品あるいは金銭で夢を買うモチーフが発展する。ここでは、乞食が神の異形の姿として表わされる。

レーゲンスブルクの橋の話は、グリム以前にはもっと整った型のものがあつた。竹原威滋「夢をめぐる日欧の民話」『民話の手帖』46号（国土社、1991年）にいう。レーゲンスブルクの近くに住む一人の農夫が、レーゲンスブルクの橋の上で宝を見つけることができるだろうという夢を見た。翌日、農夫が橋に行くと、一人の金持ちが来て何を探しているのかと尋ねた。農夫が夢の話をする、金持ちがいきなり握りこぶしで農夫の頬をなぐっていった。「ばかもの。お前は夢など信ずるのか。私もある夜、レーゲンス村の農家の屋敷の木の下で財宝を見つけるという夢をみたぞ」。農夫はそれが自分の家であることがわかったので、「このげんこつはわたしには心地いいものだ」といって家に帰り、財宝を見つけた（30頁）。竹原氏は、この話は14～15世紀のラテン語による物語集『メンサ・ピロソピカ』に載っている「夢について」という話であると指摘している。この話には、今まで見られなかった「げんこつ、あるいは平手で頬を打つ」というモチー

フが新たに加わっている。この打擲は、教区の境界石の上に座らされ、父に頬を打たれたジョンソン博士の故事と同じような、境界である橋の上での打擲であった。神前で柏手を打つと同じ行為と考えられ、この世とあの世の活性化を目的としたのであろう。橋の上で頬を打たれることによって、異界からの情報を手に入れることができたのであろう。『アラビアン・ナイト』の話では、モスクの中で寝ていた男は町奉行に捕らえられ、鞭で打たれたので半死半生の状態になった(32頁)。この場合も、この世とあの世の境界であるモスクや牢獄が出てくるので、古い習俗が復活したのであろう。単に囚人を鞭打つというのではなかったと思われる。

もっとも古い型は「夢の交換」であった。夢を見る人がそのうち一人になつてしまうと、種々の変異形が生まれてくる。その一つが、別稿で論じた「夢を買う」話であろう。信仰の面で、例えば観音様にお参りし、仏前で箴っている最中に夢に観音が現われ、福德の情報を授かる場合、参詣人は賽銭で夢を買ったことになる。参詣人が観音堂にお参りすればよいことがあると夢の中のお告げを信じて参ったのであれば、それは「夢の交換」に属する。いつもこのような場合、夢の告げを信じて出かけて行く人が、あの世、異界を代表する人の情報を手に入れて財宝を手に入れる。異界を代表するのは、しばしば乞食のような忌まれる存在である。欧州でも、リューベックの橋の話では乞食が現われて宝のありかを教える。前掲『民話の手帖』46号には、「アムステルダムへの旅」というドイツの民話を載せている。

アイダーステッツのテニグ郊外に一人の男が住んでいた。男の農場は破産寸前だった。ある晩、男はアムステルダムへ行き、そこで幸運に出会うという夢を見た。次の夜も同じ夢を見た。三日目の夜、三番目の橋の上で幸運を見つけるという夢を見た。男はアムステルダムに旅立ち、その橋の所に行き、橋の上に立っていると一人の男がやって来て自分の夢の話をした。男はいった。「テニグの近くにある家に行きました。そこの台所の戸口の前に大きな木があり、その下に銅の鉢が埋まっています、その鉢には金がいっぱいつまっています。銅製の蓋には何やら書いてありました」。アイダーステッツの男はそれが自分の家であることに気付いた。男は家に帰り、木の下を掘って金がつまった鉢を見つけた。しかし、蓋にかいてある字は読めなかった。ある日、乞食が施し物をもらいに来たが、この文字を見て「この宝の下にもっと大きな宝がある」と読んだ。乞食は食べ物をもらうと出ていった。男は庭を掘り起こすと、もっと大きな宝が入っている鉢が見つかった(106-107頁)。

この話も元の型をよく保っているが、乞食が出てきて、本当の宝のありかを教えている。乞食は欧州でも神の化現したものと考えられた時代があった。乞食は日本の「大蔵の客」のように、幸福をもたらすまればとであった。「アムステルダムへの旅」では、宝のありかに乞食が現われ、さらにその下に宝があることを教える。ここでも乞食は、キリスト教以前の神の使い、あるいは神の化現としての職能を果たしている。トルコの「バグダードの幸運」(3)では、まずブドウを口にすることができ、そのあと托鉢僧、つまり乞食僧から宝は自分の家にあることを教わる。同(2)では、貧乏になった商人は、運が好転したとき、かつて冷遇された、つまり運がついてなかった



イエメンに出かけ、失せ物を見つけ出す。これらの話は、いずれも同じ構造をとっているようである。宝のありかで、宝が乞食のような人に指示されて改めて出てきたり、冷遇されて乞食の状態になった所で、宝にあたる失せ物を見つけたりする。二度目に成功したり、三度目に成功する型の話で、二人兄弟、三人兄弟の末子成功譚にも関連する構造である。

中国では『太平広記』の巻二七六から巻二八二まで、各種の書籍から夢に関する話が集められているが、「味噌買い橋」型の話は見当たらない。巻二七七に載録してある『朝野僉載』から引用した話は次のようである。

裴元質という男が初めて科挙の試験を受けた。朝早く天子の出題に対する上奏文を口頭で述べた。夜、一匹の狗が穴から出てきたので、弓を引いて狗を射たところ、矢が狗をかすめた夢を見た。不吉に思って曹良史という男に尋ねたところ、彼も以前科挙のあった夜、同じ夢を見たという。彼がいうには、神が夢の中で解説してくれ、狗は「第」という字の頭（竹かんむり）、弓は第の身、矢は第のタテ棒、斜めの撥ねをつけると「第」という字になる。そこでお前は及第だ、といった。果たして夢のとおりであった、ということだった。

「味噌買い橋」型の話では橋の所で自分の見た夢を打ち明けられた人は、それ以前に彼自身も同類の夢を見たと言語が、全く同じ夢ではない。しかし、その夢の中に神の啓示があったことは前述した。『太平広記』の話では、夢は全く同じで、相談を受けた曹良史は、裴元質に神の啓示を伝える。神が誰かを遣わして、正夢であるという確認を与えるのである。平重盛が春日明神の霊夢によって、平家の運命を知った話も同じ構造をもっている。

重盛が夢の中で浜辺を歩いていくうちに、春日大明神の鳥居があった。人が群がっていて、一人の法師の首が挿してあった。「あの首はどうしたのか」と問うと、「平家太政入道の首で、悪行が過ぎたため、大明神がめしとらせ給うたのです」という答えが返ってきたと思った途端、目が覚めた。重盛は一門の運命が尽きんとしているのを思うにつけ、涙にむせんでいた。そのとき、妻戸を叩く者がいた。誰が来たのか訊ねさせると、瀬尾太郎兼康であった。兼康は人ばらいをしてもらい、昨夜見た不思議な夢の話をした。その夢は重盛の見た夢と少しも違わないものだった。重盛は兼康を神霊にも通じた者だと感じ入った（『平家物語』巻三、「無文」）。

夢の中で近い未来を知らせる場合、神が直接啓示しなければ、神の遣わした代理者が啓示するのであるが、この場合、瀬尾兼康がそれで、重盛もよく事情がわかっていたと見え、兼康を神に通じる者と考えている。同時性（シンクロニシティ）と呼ばれる現象であるので、ことさらに語り話として無視するわけにはゆかない。同時性の夢として『今昔物語集』に次のような話がある。これも単なる語り話やうわさ話をもとにしてつくられた話でもなさそうである。

昔、惟喬親王の家司に常澄安永<sup>つねすけやすなが</sup>という者がいた。彼は宮家の封戸<sup>ふへ</sup>から租税を徴収するため上野国に行った。年月を経て帰京の途についたが、途中、美濃国の不破の関に投宿した。彼は京に残した妻のことを思って、夜が明けたら急いで帰ろうと思っているうちに寝入ってしまった。その夜、安永は夢を見た。一人の少年が松明をもって女を連れている。よく見ると女は自分の妻であっ

た。二人は安永の部屋の隣の部屋に入った。安永が壁の穴から覗いて見ると、二人は食事をし、夫婦の交わりをした。安永はこれを見てむらむらとし、隣の部屋に踊り入って見ると人影はなく、そうこうするうちに夢も覚めた。

安永は、京になにごとか起こったのではないかと気がかりになったので、夜を昼にして急ぎ帰ってみると、妻はなにごともない様子で、安永は安心した。妻は笑っていった。「昨夜の夢に、見知らぬ少年がきて、どこともなく連れて行きました。空いた部屋に入り、二人で食事をして寝たとき、急にあなたが現われたので、大騒ぎになったと思った途端、夢が覚めました」。安永も同じ夢を見たので、尽夜兼行で急いで帰ってきたのだと説明した。妻もこれを聞いて不思議なこともあるものと思った（巻三一、九）。

ここでは、同じ夢を見た状況的な同時性はあるが、神の啓示らしいものはない。男女間の心理的な緊張がエネルギーになって二人の間に同じ夢を見させたのであろう。このエネルギーも神霊で、夢はその啓示と考えられないこともない。人は境界に行けば、神霊と接することができ、よいこと、わるいことを聞くことができた。その情報を手に入れる人は、いつも貧しい人であったが、神と接する人は、古来、心は豊でも財産は貧しかったようである。「味噌買い橋」型の話が完結するまでに、いろいろな民話や民俗がそのことに貢献したことを論じてみた。古来の人間の経験は、神秘的な面を含めて、人々によって蓄積され記憶されてきた。「味噌買い橋」の話が完結する前に、これらの知識や経験が活用されたことに対して疑いを挟む余地はない。

(1991. 5. 14 受理)